

中国秋季リーグ戦男子1部 First stage 及び女子2部結果報告

広島大学体育会バレーボール部同窓生の皆様

(同窓会連絡フォームへ登録いただいた皆様及び同窓会やコートの仲間等でご連絡いただいた皆様へお送りしています。)

いつも大変お世話になっております。

広島大学体育会バレーボール部です。

10/14、15 に広島大学において、中国秋季リーグ戦男女1部 First stage 及び女子2部が開催されました。

広島大学の結果は、以下のとおりです。

(男子)

vs 広島経済大学

○3-0 (25-19、25-22、25-22)

vs 福山平成大学

●0-3 (20-25、23-25、19-25)

vs 広島修道大学

○3-1 (25-23、23-25、25-23、25-22)

vs 東亜大学

●0-3 (22-25、16-25、22-25)

(女子)

vs 広島修道大学

○2-0 (25-15、25-9)

vs 川崎医療福祉大学

○2-0 (25-13、25-18)

vs 安田女子大学

○2-0 (25-22、25-7)

vs 山陽学園大学

○2-0 (25-18、25-16)

vs 山口大学

○2-0 (25-20、25-20)

(女子最終結果)

- 第1位 広島大学
- 第2位 山口大学
- 第3位 川崎医療福祉大学
- 第4位 山陽学園大学
- 第5位 広島修道大学
- 第6位 安田女子大学

(広大バレー部 X (Twitter))

<https://twitter.com/hirodaiVOLLEY>

まずは男子から。福山平成大学戦のみの感想です。率直に、両チームとも調子が上がらず、高さで分がある相手がブレイクを少しずつ重ねて勝利した、ただそんな試合でした。北体育館での開催でしたが、広大にもサーブミスが目立ち、アドバンテージを感じる場面はありませんでした。この試合を見据え、夏休みから女子と練習時間をずらし、オールコートでサーブを打ち込んできたことが果たして何回あったのか、この試合が目標ではなかったのか、疑問を抱かざるを得ない内容でした。個人の技術としては、切り取って見ると部分的に非常に高いものがありますが、チームとしても普段からそこに頼ってばかりで、結果が個人に依存しています。切り取られた残りの部分と本気で向き合うことを、練習から全員で行わない限り、残り2週はもちろん、今年の上がり目はもうないと思います。

続いて女子は、4季ぶりの2部優勝に加え、降格後初めてとなる失セット0の完全優勝となりました。勝因はいくつかありますが、客観的な視点で言えば、相手のサーブが非常に弱く、キャッチで苦しむことがなかったことが一番大きかったと思います。練習試合ではまともに返球できることの方が珍しかったくらいですが、返球率とサーブ効果率はおそらく広大が断トツで一番だったと思います。練習試合をしていただいた同窓生の皆様、改めましてありがとうございます。

全勝対決となった最終戦の山口大学戦では、相手エースが裏ローテのとき、相手は攻撃力が落ちる代わりに守備力が上がる状況で、ラリーが長くなるこの3ローテをいかに我慢し続けられるかが一つのポイントとなりました。これまでであれば、広大は後衛の有川や大前にトスを上げることもありましたが、二段トスの練習を重ねてきた1年生の岩永に託す形は、最後までブレることがありませんでした。岩永もみんなからの信頼と期待に応え続け、会場でご声援をくださった多くの方々は広大の新エースとして深く心に刻んだことでしょう。

ただ、岩永の成長を最も感じたのは、献身的なレシーブでした。開幕戦で地に足がついていない残り6人に対し、一人だけ少し信じられないほどの軽やかさと力強さのある動きで、

これを落としたら流れが変わりかねない1点を、5試合を通して守り続けました。体を引いて相手コートから離れていく一方のボールしか上げられなかった2週間前から一変し、足を動かし体を前に出して上げ続けたボールは、ネット際のセッターに良いリズムで向かっていただけではなく、守備から攻撃へ切り替えるスイッチとなり、チームを前に前に進ませる大きな原動力となりました。岩永が陰ながら支え続けたレシーブなしには、多くの人が涙した今大会の結果を語ることはできません。

西日が終わってから五大が終わっても基礎練習を繰り返し、練習試合はどれも散々な内容で、暑くて長い夏は体力的にも精神的にも苦しかったことでしょう。過ごしやすくなってからは頭を使う毎日で、上手いいかない日しかなかったことと思います。相手を見定め、万全の準備をしてリーグ戦に臨みましたが、それでも簡単な試合なんて一つもありません。チームを作ることがどれほど大変で、また、それがどれほど素晴らしいことか、それを二度と忘れないと思えるのは、毎日一生懸命取り組んできた何よりの証拠です。マッチポイントからの1点が遠く、トスが上がり続けた有川は極限状態だったと思いますが、決め急がず、コートの中で勝負し続けたことに4年間の成長とチームの絆を感じました。決めきれなくても信じて続けていれば、相手も人間、ミスはするのです。

2部優勝はしたものの、目標はあくまで1部昇格のはずです。その点では課題が非常に多く残りました。エンジンのかかりがあまりにも遅く、これでは入替戦はあっという間に終わってしまいます。1部のサーブだとキャッチは間違いなく乱れます。返球の質は上がったものの、新宅はセッターの見せ場である一番高い位置でトスを上げられていません。岩永はフェイントが飛ぶ前からその動作になっており、スパイク動作からのフェイントが出来ていません。有馬と東はクイックは横ではなく前にボールを要求し、ダイレクトはただ上に飛ぶのではなく踏切足を引いてきちんと飛ばないとはいけません。大前はブロックの裏のフェイントと中に入る動作の動きとキレがまだまだで、矢野はブロッカーが遅れたなら間に飛び込むなど、打たれる前から動いて技術をカバーしないとはいけません。1部は展開が速いため、合わせに依っては勝ち目がありません。自分たちなりの緩急を磨き、勝ちを急がず、相手が焦れる展開を作り続けることで1%の勝機が生まれます。秋リーグまでに取り組んできたことは全員間違っていないので、自信を持って残り3週間で過ごしましょう。

今週末は、下関武道館で男女1部 Second stage が行われます。
引き続きよろしく願いいたします。